

ミカドキジの命名、採集、および保全繁殖の歴史に関する基礎研究

伊東 剛史

はじめに

台湾固有の鳥にミカドキジという鳥がある。阿里山などの標高の高い山林に生息し、光のあたりかたで青紫にも見える黒い姿と白帯の入った長い尾羽を特徴とする、稀少な鳥である¹。鳥類の研究者や愛好家の間では、一對の尾羽から新種として記載されたことが知られている。イギリスの鳥類学者によって、1906年に *Calophasis mikado* と命名され、英名では *mikado pheasant*、和名ではミカドキジと呼ばれ続けている。台湾でも「帝雉」や「黒長尾雉」と呼ばれる。しかし、なぜ台湾固有のこの鳥がミカドキジと名付けられたのかについては、憶測で語られることが多く、出典を示した説明を見つけることは難しい²。台湾を植民地とした日本にとってミカドキジという名はどのような意味をもったのか、あるいは当時の鳥類学や鳥類の保全繁殖にとってミカドキジがどのような存在だったのかについても不明な点が多い。そこで本稿は1906年のミカドキジの発見と命名から、分類学的議論の高まりを経て、1920年代の保全繁殖に重点が移行する過程を、主にイギリスと日本における鳥類学・鳥類飼育繁殖の関連文献に基づき解明することを目指す。

このテーマは、19世紀後半のイギリスの台湾進出や、世紀末以降の日本の台湾統治とも関連する。さらに、台湾をフィールドとする自然科学の学知形成やそのグローバルな展開という問題も浮上してくる。ただし、本稿はこれらの問題については別稿を期すことにし、まずは基本的な事実関係の整理に努める。

本論に入る前に、史料に関係する事柄についていくつか説明しておきたい。まず、イギリス

本稿は、2018年度専修大学人文科学研究総合研究調査、およびJSPS科研費（課題番号17KK0021; 17KT0031）による研究成果の一部である。現在、キジ科 *Phasianidae* には、キジ亜科 *Phasianinae* など複数の亜科があり、さらにキジ亜科 *Phasianinae* はキジ属 *Phasianus*、ヤマドリ属 *Syrnistris* などの属に分類される。日本語もしくは英語でキジと名付けられる各種の鳥は、分類学上はこれらの異なる属に分類される。このような一般名詞としての英語の *pheasants* の訳語には、「キジ類」をあてた。

¹ 国際自然保護連合 (ICUN) のレッドリストによると、2016年10月の時点で、生息個体数は減少傾向にあり、6000~15000と推定され、準絶滅危惧 (Nearly Threatened) に位置づけられている。Bird Life International 2016. '*Syrnistris mikado*. The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e.T22679336A92811293'. <<http://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2016-3.RLTS.T22679336A92811293.en>> 2019年5月22日最終確認。

² 管見の限り、この点について最も体系的に調査したのは、張譽騰による台湾の博物館標本の歴史をテーマとする未刊行博士論文である。ただし、ミカドキジの命名の由来や、その後のイギリスや日本の繁殖の試みについては、同論文のテーマとは異なるため議論されていない。Francis Yui-Tan Chang, 'The Development of Biological Collections: Taiwan - An Analysis and Evaluation' (Unpub Ph.D. Dissertation, University of Leicester, 1992).

では、1826年にロンドン動物学会 (Zoological Society of London)、1857年にイギリス鳥類学者連合 (British Ornithologists' Union) が設立され、それぞれ『ロンドン動物学会紀要』 (*Proceedings of the Zoological Society of London*) と『アイビス』 (*Ibis*) を発行している。その後、イギリス鳥類学者連合を母体とし、会員間の定期的な交流を促進する目的でイギリス鳥類学者倶楽部 (British Ornithologists' Club) が1892年に結成され、『イギリス鳥類学者倶楽部紀要』 (*Bulletin of the British Ornithologists' Club*) が刊行された。一方、鳥類の飼育繁殖に関する知識の増進や情報交換を目的とし、1894年に鳥類飼育繁殖協会 (Avicultural Society) が誕生し、『鳥類飼育繁殖雑誌』 (*Avicultural Magazine*) を創刊した。イギリス鳥類学者連合とイギリス鳥類学者倶楽部が、鳥類学者 (鳥類に関する分類学的、形態学的知識を有する者) を対象としたのに対し、鳥類飼育繁殖協会は鳥類飼育の愛好家を対象としており、エッセイなども掲載された。

日本では日本動物学会の前身である東京生物学会が1878年に発足し、『動物学雑誌』の他に欧文誌も発行した。1912年、日本鳥学会が設立され、『鳥』 (現、『日本鳥学会誌』) が刊行された。1906年から1930年代にかけて、ミカドキジに関する論文や記事が、これらの刊行物に定期的に登場した。それを迎えることにより、ミカドキジ発見の経緯、採集ルートの確立、繁殖実績と保全に向けた動きなどが、具体的に明らかになるだろう。

本稿は3部構成である。まず、ミカドキジの発見と命名の経緯を明らかにする一方、それがキジ類の分類に及ぼした影響を考察する。次に、採集の対象が生きたミカドキジになった1912年以降に焦点をあて、ミカドキジがイギリスで繁殖され、さらにフランスやアメリカへと供給されたことを示す。そして最後に1915年以降、日本の鳥類学者がミカドキジの採集、研究、保全繁殖に積極的に関与していく過程を、世界的な鳥類学、とりわけキジ類の研究と関連づけながら明らかにする。

1. 発見から供給ルートの構築へ

台湾で新種のキジが発見され、そのキジがミカドキジ *Calophasis Mikado* Ogilvie-Grant と命名されたのは、1906年6月20日のことである。スコットランド出身の鳥類学者ウィリアム・オグルヴィー＝グラントが、イギリス鳥類学者倶楽部においてこれを報告したのである。報告内容は翌月10日発行の『イギリス鳥類学者倶楽部紀要』に掲載された³。新種の発見は、全体標本ではなく一対の中央尾羽に基づいた。その特徴は次のように記載されている。「この羽は

³ *Bulletin of the British Ornithologists' Club*, 16 (1905/06) pp. 122–123.

ビルマカラヤマドリの中央尾羽と形が似ているが、色は黒。およそ 1.5 インチの間隔で、灰色の横帯が 12 本ほど入っている。既知のキジ種のどれとも異なる尾羽。根元が欠けているが、長さは約 18 インチ」。オグルヴィー＝グラントは採集人グッドフェローの手紙を引用し、尾羽が入手された経緯を紹介した。

われわれの荷物を運搬してくれることになった蕃人の頭飾りに、わたしはこの羽があるのに気がついた。この蕃人は、阿里山でその鳥を仕留めたと言っていた。また、その鳥は希少であるとも言っていた。

グッドフェローに同行したのは、阿里山に集落を築いていたツォウ族の男性だったと推測される。1896 年に台湾原住民の人類学調査を行い、ツォウ族を新高族と名付けた鳥居龍蔵は、羽根飾りのある帽子を被ったツォウ族男性を写真におさめた。そのひとは、横縞の入ったミカドキジのものに見える長い尾羽で飾られた帽子を被っている⁴。

新発見の鳥がミカドキジと名付けられた由来を説明しているのは、オグルヴィー＝グラントがロスチャイルドから聞いたという次の話である。

ロスチャイルド氏によると、東京には帝が所有する生きている鳥獣のコレクションがあり、そこに台湾産の新種のキジが雌雄一対あるとのことである。ロスチャイルド氏は未だ成功してはいないが、その新種を入手しようと試みてきた。そのキジは「胴は青く、脚は赤い」と言われており、もしかしたらサンケイのことかもしれない。

サンケイ（山鶏）*Lophura swinhoii* Gould, 1863 とは、台湾の自然誌の先駆的研究者であるロバート・スウィンホーの名を冠した台湾島固有のキジの一種で、青い胴と赤い肉垂や脚とのコントラストが特徴的である。ミカドキジの体色も光の角度により青みが入るが、尾羽の形状や彩色は大きく異なる。ロスチャイルドが入手しようと試みてきた未記載のキジ種の正体は、このサンケイではないかとオグルヴィー＝グラントは考えた。しかし、尾羽一対を手にしたオグルヴィー＝グラントには、命名の由来となるような手がかりは、非常に限られていただろう。発見者の名前を冠した種小名とすることは一般的だったが、このときオグルヴィー＝グラントはグッドフェローから送られてきた新種の鳥類のうち、すでにグッドフェローの名を冠したイタ

⁴ 鳥居龍蔵写真資料研究会・東京大学総合研究博物館「鳥居龍蔵とその世界」<http://torii.akazawa-project.jp/cms/index.html> 該当するツォウ族男性の写真は、「鳥居龍蔵とその世界」<http://torii.akazawa-project.jp/cms/photo_archive/photo_index.html#tayal>に掲載（No. 7861）。2019 年 5 月 18 日最終確認。

カキウイタダキ *Regulus goodfellowi* Ogilvie-Grant, 1906 を命名していた⁵。ほかにも、この時期には種小名を *goodfellowi* とする新種が次々と記載されていたため、上記の伝聞に因んで *mikado* とするのが自然な流れだったのかもしれない。ミカド *mikado* という言葉も、ギルバート・アンド・サリヴァンの人気オペレッタ『ミカド』(1885年初演)やジャポニズムを通じて、異国情緒のある言葉として定着していたと思われる。

1907年、オグルヴィ＝グラントは「台湾島の鳥類」を発表した。スワインホーらがまとめた台湾の鳥類目録に、グッドフェローが発見した新種などを反映させ、これを大幅に更新したものである。清朝海事関税庁の役人として中国に滞在し、台湾への調査旅行の経験もあるジョン・デイヴィッド・ラ・トゥーシェの協力を得て作成され、『アイビス』に掲載された⁶。「台湾島の鳥類」は、冒頭でミカドキジを取りあげており、台湾産鳥類の分類学的研究にとってのミカドキジの重要性がうかがえる。その内容は2点ある。ひとつは、実はオグルヴィ＝グラントはグッドフェローからミカドキジの雌の標本を受け取っていたのだが、見落としていたという報告である。標本は1906年2月、阿里山の7000フィート地点で捕獲されたものである。新たにこの標本を考察したオグルヴィ＝グラントは、ミカドキジの雌とビルマカラヤマドリの雌の外見の類似性を指摘した。

ミカドキジに関するもうひとつの追記事項は、グッドフェローの採集旅行記である。前年のミカドキジ発見の報告は、グッドフェローの手紙はごく一部しか紹介していなかったが、新たにそれを公開してグッドフェロー自身の言葉で過酷なフィールドワークの様子を伝え、ミカドキジの発見が厳しい条件下での僥倖だったことを印象づけた。具体的には、現地の抗日運動に巻き込まれる危険があったこと(実際に1907年11月には、漢族による抗日運動のひとつ、北埔事件が起きた)、そのため通訳2名(日本人1名と原住民1名)の他に日本人警察官12名が、多数の原住民とともに同行したこと、そして当局の許可を得て山岳地帯に入るためには、オグルヴィ＝グラントが手配した紹介状が不可欠だったことが記されている。

手紙の内容に沿って、グッドフェローの行程を辿ってみよう。1906年1月初旬、台南を出発し、「鉄道でおよそ45マイル北上して濁水に至る」とある。ここで注意が必要なのは、台南から濁水までは45マイル以上あるうえに、濁水駅を通る集集線はこの時期まだ開通していない点である。ここで濁水とは、やはり台南からの距離は45マイル以上となるが、同じ濁水溪沿いにある二八水(現、二水)駅のことだろう。二八水であれば、そこからトロッコで向かった林圯埔(現、竹山)への移動距離が、グッドフェローが記録した10~12マイル程度となり辻褃

⁵ *Bulletin of the British Ornithologists' Club*, 16 (1905/06) p. 17.

⁶ W. R. Ogilvie-Grant and J. D. D. LaTouche, 'On the Birds of the Island of Formosa', *Ibis*, 9th ser. vol. 1 (1907) pp. 151-198, 254-279.

があう。いずれにせよ、ここで重要なのは、グッドフェローが開通したばかりの縦貫線を利用したことである。1900年、高雄・台南間に開通した縦貫線南部線は、1905年に二八水（濁水）のさらに北にある彰化まで延伸したばかりだった⁷。こうした情報を得て、グッドフェローは台湾への採集旅行を計画したのではないだろうか。

林圯埔（現、竹山）からの移動は徒歩となった。2日目は、20マイル離れた漢人の集落に向かい、3日目にはさらに18マイル移動して、標高2500フィート地点にある蕃族の集落に到着した。そして4日目に東埔の集落へ、5日目に楽楽山にある最も標高の高い集落へと移動した。4日目と5日目の移動は、距離は短いものの非常に困難だったと記している。なお、グッドフェローの記載にはないが、東埔および楽楽山に集落を築いていたのはブナン族であり、グッドフェローに同行したと思われるツォウ族とは異なる。グッドフェローは6日目に、楽楽山より玉山の標高9000フィート地点まで登り、そこに10日から12日間野営した。しかし、たいした成果をあげることができず、雪が降り出したため、原住民に懇願されて6000フィートの地点まで山を降りた。その後、再び8000～9000フィート地点に登り、8日間キャンプを張ったが濃霧のためにほとんど採集に出ることができなかった。結局、3ヶ月滞在したが、悪天候のため採集活動を行うことができたのは、その半分の日数もなかった。下山を開始した日に、荷物運搬の原住民の帽子の羽根飾りが、これまでに見たことがない鳥のものであることに気がつき、この人物から阿里山でその鳥を捕獲したと聞いた。しかし、費用等の問題もあり、採集旅行を延長して阿里山に向かうことはできなかった。以上が、ミカドキジの尾羽が一對のみイギリスに送られることになった顛末である。

グッドフェローが台湾に赴いた翌年には、別のルートでミカドキジの全体標本がイギリスに送られた。それを受け取ったウォルター・ロスチャイルドは、鳥類学者倶楽部の例会で標本を披露するとともに、他のキジ属の種との比較の観点から、自身の考察を報告した。その内容を検討する前に、標本の入手経路について関連する人物とともに説明しておきたい。まずウォルター・ロスチャイルドは、ロスチャイルド家のロンドン分家の嫡男だが、動物学と標本収集に傾倒し、1889年にロスチャイルド家所有のトリング・パークに大規模な動物学博物館を築いた。莫大な資金力を背景に集められた数多くの貴重な標本は、ロスチャイルドの死後、本人の遺言によりロンドンにある自然史博物館に寄贈された⁸。現在は、トリング自然史博物館として、ロンドン自然史博物館により運営されている。そのような貴重なコレクションの形成に寄与し

⁷ 『台湾鉄道史』中巻（台湾総督府鉄道部、1911年）122ページ。

⁸ Karl Jordan, 'Rothschild, Lionel Walter, second Baron Rothschild (1868–1937), zoologist', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004. Oxford University Press. <<https://0-www-oxforddnb-com.catalogue.wellcomelibrary.org/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-35843>> 2019年5月19日最終確認。

たのが、依頼に応じて各方面に派遣された採集人や、各地に点在した標本仲買人（博物商）である⁹。ミカドキジは、そうした博物商のひとりアラン・オーストンから入手したものであった。この人物についてはオーストンの名を冠した種小名や亜種小名が散見されることから、その存在が知られていたが詳細は不明だった。しかし、近年、動物学者の川田伸一郎により文献調査が行われ、オーストンの横浜での活動内容やオーストンが派遣した日本人採集人について基礎資料が整えられた。それによると、オーストンは 1853 年にイングランドのサリー州で生まれ、レーンクロフォード商会の一員として上海に赴任したのち、1873 年には横浜支社に異動した。1879 年に独立してアラン・オーストン社を立ち上げると、輸入品の販売と日本産の物品の輸出を手がけたほか、のちに船舶事業にも進出した。なお、横浜ヨットクラブ創立者のひとりとしても知られている¹⁰。

オーストンが博物商として活躍したのは、およそ 1890 年代から横浜で没した 1915 年までである。この間、新聞広告などで標本買取を宣伝する一方、海外のコレクターに対しては販売目録を発行していた。1910 年発行の『台湾産鳥類目録』には、ミカドキジ同様に台湾の固有種であり、前述のグッドフェローの手紙にも登場したサンケイも登録され、30 シリングと最高額がつけられている。次に高額なのは、カンムリワシ *Spilornis cheela* Lath.（アジアに広範に生息する。台湾や琉球諸島に生息するものは現在では亜種に位置づけられている）で、25 シリングである。キジ科ではタイワンキジ *Phasianus colchicus formosanus* Elliot（目録には *Phasianus formosanus* Elliot と記載）で、12 シリングとある。ミカドキジは登録されてはいるものの、価格はつけられていない¹¹。このときオーストンにミカドキジの在庫はなかったはずである。

オーストンは収集した標本を海外のコレクターに輸出するだけでなく、黎明期にある日本の動物学研究を支援した。川田の調査によると、1904 年には東京帝国大学に「本邦編纂動物 450 点並びに沖縄諸島産動物 50 点」を寄贈し、銀杯を下賜されている¹²。オーストン死去の際には、東京帝国大学動物学科で学んだ永澤六郎が『動物学雑誌』に追悼文を寄せ、次のような飯島魁（日本鳥学会初代会頭）の紹介状が引用された。「而も、彼功績を裏書するもの、別記、諸研究者の氏名録に及くものはなし。是等の書誌は、其研究の資料として、彼の標本並びに観察を用いたるなり。されば其等論文中には、彼の名誉の為に彼の名を附せられたる、幾多の動物の記述せられあるを見るべし。而も其等は、何れも、上記論著の名声を益す所因のものたらざりし

⁹ Miriam Rothschild, Walter Rothschild, *The Man, the Museum and the Menagerie* (London, 2008) pp. 154–184.

¹⁰ 川田伸一郎「アラン・オーストン基礎資料」『山階鳥学誌』47（2016 年）59–93 ページ。

¹¹ Alan Owston, *List of Birds of Formosa* (Yokohama, 1910).

¹² 川田「アラン・オーストン基礎資料」77 ページ。

はなし」¹³。

数々の標本を入手し、日本内外の研究者、コレクターにそれを提供しながらも、オーストンには自身で琉球諸島や台湾島まで採集に赴いた形跡はない。それらはオーストンが雇った、多くの日本人採集人によって集められたと考えられている¹⁴。ロスチャイルドの鳥類学者クラブでの報告には、オーストンの名前だけが登場し日本人採集人の名は記されていない。しかし、後述する黒田長礼が著した『台湾島の鳥界』には、最初のカドキジの完全標本は菊池米太郎によって確保されたことが記載されている。菊池は、海南島（1902年～1904年）および太白山（1905年）で標本収集の実績をつんだのち、1906年に渡台した。オーストンの依頼を受けて菊池は、11月に阿里山の塔山でカドキジの捕獲に成功したほか、合計20羽以上を収集した。それらはすべて横浜のオーストンに送られ、さらに海外のコレクターのもとに渡ったという¹⁵。ロスチャイルドがオーストンから雄7羽（成鳥1羽、成鳥に近い幼鳥3羽）、雌4羽の計11羽を入手したことはわかっているが、他に誰がカドキジを入手したのかは判明していない¹⁶。

それでは次に、新たに入手された11羽に基づくロスチャイルドの報告内容をまとめておこう。オグルヴィ＝グラントは、カドキジをカラヤマドリ *Calophasis ellioti* Swinhoe, 1872（現学名 *Symatricus ellioti*）と同属とした。中国南東部に固有のカラヤマドリは、キジ科ヤマドリ属のタイプ属として扱われた鳥類である。たしかにカドキジとカラヤマドリは、尾羽の数が16と同一であり色は異なるものの尾羽の横帯は似ている。しかし、ロスチャイルドは全体を考慮したとき、尾羽の数やその他の特徴はカドキジを含めたカラヤマドリ属をキジ属から区別するほどのものではなく、カドキジも含めて本来のキジ類はすべてキジ属 *Phasianus* とすることを提唱した。したがって、ロスチャイルドによるキジ類の分類は、下記のようになった¹⁷。

- 1 *Phasianus colchicus*（コウライキジ）亜種多数
- 2 *Phasianus reevesi*（オナガキジ）
- 3 *Phasianus ellioti*（カラヤマドリ）
- 4 *Phasianus humie*（ビルマカラヤマドリ）および2亜種
- 5 *Phasianus soemmeringi*（ヤマドリ）および3亜種
- 6 *Phasianus mikado*（ミカドキジ）

¹³ 永澤六郎「故アラン・オーストン君」『動物学雑誌』28（1916年）3-5ページ。

¹⁴ 川田「アラン・オーストン基礎資料」78-85ページ。

¹⁵ 黒田長礼『台湾島の鳥界』（日本鳥学会叢書第6編、1916年）32ページ。

¹⁶ *Bulletin of the British Ornithologists' Club*, 21 (1907/08) p. 23.

¹⁷ *Bulletin of the British Ornithologists' Club*, 21 (1907/08) p. 24.

このようにミカドキジの分類は、それがキジ属かヤマドリ属かという問題だけでなく、キジ属とヤマドリ属との違いは何かというより大きな問題を導き、ミカドキジの研究にはその問題の解決に資することが期待された。

管見の限り、菊池米太郎の次にミカドキジの全体標本を入手したのは、バルト・ドイツ人のアーノルド・モルトレヒトである。モルトレヒトはウラジオストク移民病院の外科医を務めながら、各地で採集活動を行った。台湾固有のアオガエル的一种、モルトレヒトアオガエル *Rhacophorus moltrechti* Boulenger, 1908 など、その名を冠した昆虫がある¹⁸。モルトレヒトは 1908 年、3 ヶ月半をかけて台湾各地で採集に従事し、阿里山ではミカドキジの雄の成鳥と幼鳥を 1 羽ずつ捕獲した。その後、ミカドキジの標本をペテルブルクに、その他標本の一部をオグルヴィ＝グラントのもとに送った。これを考察したオグルヴィ＝グラントは、「台湾の鳥類に関する

補注」を発表し、前年公表した目録を更新した。

発表媒体は『アイビス』である¹⁹。なお、黒田長礼によれば、1908 年 4 月に捕獲された雄が台北博物館に展示されたとある²⁰。モルトレヒトの採集旅行の際に入手されたのか、このとき菊池米太郎の協力があったのかは、現時点では判明していない。

オグルヴィ＝グラントは「台湾の鳥類に関する補注」において、ミカドキジの脚の鱗の形状について考察を加えた。ミカドキジの該当部位は、八角形上の小さな鱗が網目状に隆起しており、キジ属のものとも、他のヤマドリ属のものとも異なるという。ミカドキジをキジ属に分類しようとするロスチャイルドに対し、オグルヴィ＝グラントはミカドキジの独自性を強調したのである。なお、この特徴に気がついたのはアマチュア鳥類画家のヘンリ・ジョーンズで、ロスチャイルド所有の標本をもとにミカドキジの肖像画を描いているときだったという。『アイビス』には、このジョーンズのスケッチに基づくミカドキジの雌雄一対



図1 ミカドキジの番
出典：Ibis, 9th ser. vol. 2 (1908), plate 13.

¹⁸ モルトレヒトについては、本号所収の櫻井文子「蝶王国台湾の創造」を参照のこと。

¹⁹ W. R. Ogilvie-Grant, 'Additional Notes on the Birds of Formosa', *Ibis*, 9th ser. vol. 2 (1908) pp. 600-608.

²⁰ 黒田長礼『台湾島の鳥』（日本鳥学会叢書第6編、1916年）32ページ。

の肖像画と、脚先の拡大図が掲載された。前者はミカドキジの肖像画としては、最初期のものになる（図 1）。

2. 生捕から繁殖へ

1912 年、阿里山森林鉄道が開通し、ミカドキジの収集は新たな展開を迎えることになる。阿里山森林鉄道は、阿里山の森林資源開発を目的とし、台湾総督府によって建設された²¹。まず嘉義から海拔 2000 メートルにある二万坪駅が開通し、1913 年には阿里山駅（現、沼平駅）まで延伸した。さらに 1915 年には、菊池米太郎が最初にミカドキジを採集した塔山と阿里山駅との間に眠月線（塔山線）と呼ばれる支線が建設された²²。

グッドフェローが再び台湾を訪れたのは、まさに阿里山森林鉄道が嘉義から二万坪駅まで開通した 1912 年である。ミカドキジを生捕にし、ヨーロッパに持ち帰るという明確な目的をもつての再訪だった。前回と同じように、グッドフェローは採集旅行の行程を詳しく記録し、オグルヴィ＝グラントへの手紙にまとめている。その一部は『アイビス』に掲載された²³。それによると、グッドフェローは最初から阿里山に赴いている。前回の旅行で原住民から得た情報や、菊池の阿里山での採集成功に基づいた判断だろう。玉山を臨む東側の斜面の岩棚にミカドキジが生息し、早朝と夕方に餌を求めて稜線に飛来することが確認できたため、グッドフェローはそこにくり罠を設置した。本来は鳥網を用いて生捕にするつもりだったが、傾斜が急なために不可能で、仕方なく原住民の案を採用して、くり罠を用いることにした。もし、斜面を下ることが可能であれば、もっと数多く生捕できただろうと報告している。グッドフェローがくり罠を忌避したのは、鳥が傷つく恐れがあるからである。実際、13 羽が捕獲されたが、内 2 羽は罠にかかったことが原因で死んでしまった。他に銃で撃ち、剥製にしたものを除けば、雄 8 羽、雌 3 羽が生捕にされ、イギリスに持ち帰られた。

グッドフェローの報告で興味深いのは、その後の繁殖実験に必要と思われる情報を採集旅行の過程で取得し、それがこのようなかたちで読者へと伝達される場所である。グッドフェローはミカドキジを剥製にした際、嗉嚢（頸のあたりにある消化器の一部で餌をとると膨らむ）の内容物を調べ、少なくともかれが現地に滞在した春先には、ミカドキジは特定の緑葉を餌にし

²¹ 台湾の森林開発については、米家泰作、竹本太郎「帝国日本の近代林学と森林植物帯—19 世紀末台湾の調査登山と植生「荒廃」『アリーナ』21（2018 年）138–152 ページ；竹本太郎「統治初期台湾における玉山の登頂と阿里山森林の発見」第 129 回日本森林学会大会、2018 年（日本森林学会大会発表データベース）。

²² 阿里山林業鐵路及文化資産管理處「歴史紹介」<<https://afrc.h.forest.gov.tw/0000052>> 2019 年 5 月 19 日最終確認。

²³ W. R. Ogilvie-Grant, 'Further Notes on the Birds of Formosa', *Ibis*, 9th ser. vol. 6 (1912) pp. 643–657.

ていることがわかった。最初は葉を餌にしなが、穀類に慣れさせたようである。一方、冬期は昆虫がほとんどいないため、昆虫が嚙嚙に含まれていたミカドキジは1~2羽程度しかいなかった。グッドフェローは、季節によりノイチゴを餌にするのではないかと指摘している。目的の鳥を解体することは、標本を作成するためだけでなく、飼養に必要な情報を得るための基本的手段だったことがうかがえる。産卵期も解剖により推測された。グッドフェローは4月初頭に標本にした鳥が、これから繁殖期を迎える状態だったため、4月下旬から産卵期が始まるのではないかと予測した。実際に生捕にした雌1羽は、5月初旬に産卵が始まった。

もうひとつ興味を引くのは、ミカドキジの天敵であるテンに悩まされたと告白する件である。グッドフェローは、テンが毎晩のようにミカドキジを狙いに野営地にやってくるため、眠ることができなかつたと振り返っている。罠を設置しても効果はなく、「昨今の情勢」を考えれば銃を用いることはできなかつたと記す。「昨今の情勢」とは、林圯埔事件のことだと考えられる。グッドフェローが1906年に玉山に向かう途中で滞在した林圯埔では、1912年3月に派出所勤務の警察官3名（日本人巡查2名および漢人巡查補1名）が漢人に殺害される事件が起きていた²⁴。背景には、台湾総督府に無主地と判断されたこの地の竹林が三菱製紙工場に払い下げられたため、竹産物採集を糧とする地元住民の間に不満が蓄積していたことがあげられる。竹林の使用権をめぐる生じた抵抗運動は、林圯埔事件以降も1929年まで続いた²⁵。このようにグッドフェローの採集旅行を取り巻く状況として、森林資源開発にともなう内陸部への交通手段の発達だけでなく、内陸部を総督府の統治機構に組み込もうとする日本への抵抗運動にも注意を払う必要がある。

グッドフェローが持ち帰ったミカドキジの繁殖については、『ロンドン動物学会紀要』や『鳥類飼育繁殖雑誌』に記事が掲載されたので、その後の経過を追うことができる。まず、1913年6月3日、ロンドン動物学会の鳥類部門キュレーターのデイヴィッド・セス＝スミスは、ジョンストン夫妻から預けられたミカドキジの卵が無事孵化したことを動物学会例会において発表した²⁶。経緯は判明していないが、ミカドキジはジョンストン夫人が所有し、一部の卵を動物学会に預けたようである（『ロンドン動物学会紀要』には、3月25日到着と記載されている）²⁷。なお、セス＝スミスは、ミカドキジの卵は他のキジの卵よりも大きかったこと、抱卵期間は多数のキジが24日であるのに対し28日だったこと、そして孵化後の雛も他のキジ類と比較して大きめであり、羽毛もしっかり生えていることを報告した。同年9月には、「ジョンストン夫

²⁴ 『台湾日日新報』1912年3月27日。

²⁵ 呉秘察監修（横澤泰夫訳）『台湾史小辞典』（中国書店、2007年）168ページ；王泰升（鈴木敬夫訳）「植民地下台湾の弾圧と抵抗-日本植民地統治と台湾人の政治的抵抗文化」『札幌学院法学』21（2004年）223-278ページ。

²⁶ *Proceedings of the Zoological Society of London* (1913) p. 818.

²⁷ *Proceedings of the Zoological Society of London* (1913) p. 242.

人」よりミカドキジが2羽（性は不明）寄贈されたことが『ロンドン動物学会紀要』に記載されている²⁸。動物学会のもとで孵化した鳥が、そのまま動物学会に寄贈されたのではないかと推測される。

11月には、ジョンストン夫人から寄贈されたミカドキジとカラヤマドリとの交雑種、雄1羽に関するセス＝スマスの報告がある。「非常に色の濃いカラヤマドリのような。頭、頸、胸、腹は黒い。尾も黒いが、栗色で覆われており、白い幅広の横帯が入る」と描写されている²⁹。翌年2月、今度は交雑種の雌について、再びセス＝スマスの報告がある。その交雑種は、ジョンストン夫人が飼育しヘンリ・ジョン・エルウェスから寄贈されたと記録されている。ナチュラル・ヒストリーの著述家であると同時に採集人でもあったエルウェスは、グッドフェローの1912年の阿里山での採集時に、現地でグッドフェローと会っている。詳しい経緯はわからないが、その縁でミカドキジを入手していたのだろう³⁰。

以上の『ロンドン動物学会紀要』の記事からは、「ジョンストン夫人」がキーパーソンとして浮上してくる。このジョンストン夫人とは何者だろうか。これまでの調査で、イギリスの朝刊紙『スタンダード』や夕刊紙『イヴニング・スタンダード』を発行したジェイムズ・ジョンストンの子エドウィン・ジェイムズ・ジョンストンの妻だったことがわかっている。ジョンストンは、1890年代から1904年頃まで、サフォーク州ベリ・セント・エドマンズにあるカントリー・ハウス、ルーフム・ホールを所有しており、1899年にはサフォーク州長官を務めた³¹。ジョンストン夫人は海外の鳥の収集と繁殖に本格的に取り組んでおり、イギリス鳥類飼育繁殖協会のもとで発表された「連合王国における最初の繁殖事例一覧」には、ミカドキジも含めて6種が登録されている。そこには、ミンダナオ島（フィリピン諸島の主島のひとつ）の固有種であるアポインコ *Trichoglossus johnstoniae* Hartert, 1903 が含まれる³²。種小名が示すとおり、ロスチャイルド博物館の鳥類学部門キュレーターのハータートが、ジョンストン夫人に捧げた学名である。また、ジョンストンに関する記事は、上記の鳥類飼育繁殖協会が発行する『鳥

²⁸ *Proceedings of the Zoological Society of London* (1913) p. 1094.

²⁹ *Proceedings of the Zoological Society of London* (1913) p. 1099.

³⁰ エルウェスについては、A. L. Troelstra, *A Bibliography of Natural History Narratives* (Zsist, 2016) p. 146. グッドフェローと阿里山で合流したことについては、Ogilvie-Grant, 'Further Notes on the Birds of Formosa' p. 656.

³¹ 『鳥類飼育繁殖雑誌』1935年12月号掲載のグッドフェローの記事「メルヴィル島における採集」が、「ジョンストン夫人がルーフム・ホールでかつて飼育していたキビタイヒスイインコの番」に言及していること、およびこの「ルーフム・ホール」の所有者が一時期、エドウィン・ジェイムズ・ジョンストンだったことから。Walter Goodfellow, 'A Collection on Melville Island', *Avicultural Magazine*, 4th ser. vol. 13 (1935) p. 321; Nick Kingsley, 'Landed Families of Britain and Ireland: (58) Agnew of Rougham Hall and Great Stanhope St., London, baronets'. <<http://landedfamilies.blogspot.com/2013/07/58-agnew-of-rougham-hall-and-great.html>> 2019年5月19日最終確認。

³² The Avicultural Society, 'First Breeding Register of Birds in the UK under Captive Conditions'. <<http://www.avisoc.co.uk/wp-content/uploads/2012/01/UK-First-Breeding-Register.pdf>> 2019年5月19日最終確認。



図2 ミカドキジの番

出典： *Avicultural Magazine*, 3th ser. vol.3 (1915) page facing p. 265.

類飼育繁殖雑誌』にも度々掲載されている。後述するフランス出身の鳥類学者デラクールとも書簡を交していたことから、鳥類繁殖家の間では有名な人物だったと思われる。

1915年には、ジョンストンが執筆した記事「ミカドキジ」が『鳥類飼育繁殖雑誌』に掲載された³³。グッドフェローが最初にミカドキジを「発見」した年などの記述が不正確だが、彼女が入手したミカドキジのその後の足取りを辿るのに、重要な情報が含まれている。まず、グッドフェローの収集したミカドキジは、ジョンストンに届けられたことが確認できる。ここで生まれた卵の一部が彼女のもとで、一部が動物学会で孵化したようである。ミカドキジの番の絵が挿入され、「ジョンストン夫人の鳥舎の生きている鳥より」との注意書きが添えられた(図2)。剥製ではなく、生きている鳥を描いたミカドキジの肖像画としては、最初のものになるかもしれない。ジョンストンは雌雄一対をロンドン動物園に寄贈した他に、ニューヨーク動物園(ブロンクス動物園)と「フランス」、「オーストラリア」にも、それぞれ雌雄一対ずつ寄贈し、自身のもとには雌雄二対と孵化したばかりの幼鳥3羽が残っていると記している。ブロンクス動物園を運営するニューヨーク動物学会の1914年刊行の年次報告書には、鳥類学部門にとって前年の最大の成果は、3羽のミカドキジがジョンストン夫人から寄贈されたことだと確かに記載されている³⁴。「フランス」と「オーストラリア」の具体的な送付先については、前者はこの時期にミカドキジを入手したデラクールのことだろう。後者については、外国産動物の繁殖に

³³ Mrs. Johnston, 'The Mikado Pheasant', *Avicultural Magazine*, 3th ser. vol. 3 (1915) pp. 265-266.

³⁴ *Annual Report of the New York Zoological Society* (1914) p. 80.

取り組んでいたヴィクトリア気候順化協会かもしれない。

ニューヨーク動物園にミカドキジが送られるよう手配したのは、ウィリアム・ビービである。コロンビア大学で生物学を学んだビービは、1899年に開園したニューヨーク動物園の鳥類部門のアシスタント・キュレーターに雇用された。そして、研究者としての資質が認められると、ニューヨーク動物学会の支援により、1909年から17ヶ月間かけてキジ類の地理的分布に関する探検調査を行った³⁵。帰国後は各地で収集した標本と、ロンドン、ベルリン、トリングなどの博物館に所蔵された標本とを分析し、キジ類のモノグラフ（特定の分類に属する生物に関する包括的な研究）の完成を目指した。その成果は、1918年から1922年にかけて刊行された『キジ類総説』に結実したが、一部は先行してニューヨーク動物学会刊行の専門学術誌『動物学』に発表された。1914年同誌掲載の「キジ類の予備調査」では、中央尾羽の換羽様式に着目する意義を説き、キジ属とヤマドリ属の分類については、中央尾羽や外側尾羽の横帯の有無などに基づき、以下の種・亜種をヤマドリ属に分類した。

Syrmaticus reevesi Gray

Syrmaticus ellioti Swinh

Syrmaticus humiae Hume

Syrmaticus burmanicus Gates

Syrmaticus mikado Grant

Srymaticus soemmerringii soemmerringii Temm

Syrmaticus soemmerringii scintillans Gould

Syrmaticus soemmerringii ijimae Dresser

この時ビービは、ロンドン自然史博物館鳥類学部門のキュレーターだったリチャード・シャープ作成の目録に依拠し、ヤマドリの属名としてオグルヴィ＝グラントが用いた *Calophasis* ではなく *Syrmaticus* を用いた。タイプ属のカラヤマドリも、従来の *Calophasis reevesi* ではなく *Syrmaticus reevesi* と表記された³⁶。この表記は、次節で扱う『キジ類総説』にも引き継がれた。

³⁵ Keir B. Sterling, 'Beebe, William (29 July 1877–04 June 1962)', *American National Biography*, February 2000. Oxford University Press. <<https://doi.org/10.1093/anb/9780198606697.article.1300112>> 2019年1月19日最終確認。

³⁶ William Beebe, 'Preliminary Pheasant Studies', *Zoologica: Scientific Contributions of the New York Zoological Society*, 1 (1914) pp. 262, 283–284; R. Bowdler Sharpe, *A Hand-list of the Genera and Species of Birds*, vol. 1 (London, 1899) pp. 37–38. なお、シャープは自然史博物館におけるオグルヴィ＝グラントの前任者である。1909年、病によるシャープの辞任により、オグルヴィ＝グラントが鳥類部門キュレーターに登用された。

3. 日本人鳥類学者の参入と保全繁殖への移行

1916年4月、台湾総督府は日本の台湾統治20年を記念して台湾勸業共進会を開催した³⁷。東京帝国大学理科大学動物学教室で学ぶ黒田長礼は、この機会に台湾島の鳥類を調査してミカドキジの標本を入手するため、4月から5月にかけて台湾を巡った。その記録は、『台湾島の鳥界』と題する小冊にまとめられ、1916年、日本鳥学会の臨時刊行物として出版された³⁸。1912年設立の日本鳥学会が、1915年に学会誌である『鳥』（現、『日本鳥学会誌』）を創刊してから間もなくのことである。

日本の鳥類学者が最初に取り組んだ活動のひとつは、琉球諸島、台湾島、朝鮮半島など日本の「国土」に編入された地域をフィールドとする標本採集と分類学的研究だった。このような動きと連動し、台湾では1908年に台湾総督府民政部殖産局附属博物館（当初の名称は、児玉総督後藤民政長官記念館）が設立された³⁹。この時、民政部殖産局は博物館に標本を集めるため、オーストンの採集人だった菊池米太郎を雇用したようである。ただし、黒田の採集旅行には同行できなかったと、『台湾島の鳥界』には記載されている。ここで黒田の記録を確認しておきたい⁴⁰。

まず黒田は、「内地」にあるミカドキジの標本は、台湾総督府から東宮御所に献上された1点が確認されており、その他にはもう1点あるかどうかだと記述している。ロスチャイルドがオグルヴィ＝グラントに伝えたように、仮に明治天皇のもとで雄雌一対が飼育されていたとしても、標本としては残らなかったことになる。一方、台湾には台湾博物館に雌雄一対（雌は簡易剥製）の他、台湾総督府国語学校に雌が1点（簡易剥製、1912年3月採集）と個人所有のものが数点ある他、共進会でも雌雄一対（1916年3月採集）が展示されたと記されている。黒田の推測では、1912年採集のものは、グッドフェローが阿里山でミカドキジを採集した際に入手したものである。

前述のとおり菊池が不在のため、黒田は自身で阿里山に採集に赴くことを断念し、嘉義庁の「捕獲方」に採集を依頼した。「捕獲方」は子供9名と巡査補1名を含む原住民たちとともに阿里山において1週間採集を行い、雄1羽、雌3羽の捕獲に成功した。この報告を受けた黒田は、阿里山森林鉄道で「第三スイッチ」まで登り、記念写真を撮った。ミカドキジを抱える黒

³⁷ 林品章『日本統治時期の大型行事にみる視覚伝達デザイン-台湾視覚伝達デザイン史研究(5)』『デザイン学研究』48(2001)93-102ページ。

³⁸ 黒田『台湾島の鳥界』。また黒田の略歴については、下稲葉さやか、安田雅俊「日本哺乳動物学会と2人の哺乳類学者、黒田長禮と岸田久吉」『哺乳類科学』58(2018)161-174ページ。

³⁹ 野林厚志「植民地国家から国民国家へ継承された博物館」久留島浩、趙景達編『国民国家の比較史』(有志舎、2010年)282-292ページ。

⁴⁰ 黒田『台湾島の鳥界』31-34ページ。



図3 ミカドキジ採集の記念写真

出典：黒田長礼『台湾島の鳥界』（日本鳥学会叢書第6編、1916年）33ページ。

田とともに、罾の用意を手伝った子どもたちが写っている（図3）。「第三スイッチ」とは、終点、阿里山駅（現、沼平駅）の手前である神木駅（標高2138メートル）のことである⁴¹。鉄道が開通したことで、阿里山までのアクセスが格段に容易になったことがわかる。

菊池はこのとき、阿里山よりもアクセスが困難な霧社方面で採集活動に従事し、そこで新たにミカドキジを発見してこれを採集した。その後上京した菊池からこのことを聞いた黒田は、「ミカドキジの新産地」と題する報告を『動物学雑誌』に投稿した。それによると、菊池は標高7000～8000フィート地点にあるサラマオ社で雌を1羽採集し、南投庁長の石橋亨に寄贈した⁴²。黒田は、おそらく標高6000～7000フィートより高地の森林であれば、他にもミカドキジの生息地はありそうだと推測する一方、乱獲しない限り「此の珍種を永久に保つことを得べく大に喜ばしきことなり」と述べ、ミカドキジを絶滅させないよう保護すべきだと訴えている⁴³。

『鳥』の「雑報」欄によると、黒田の訪台以降もミカドキジの生捕が続いたようである。まず、1918年には台湾総督府がミカドキジを天覧に供すため菊池米太郎を派遣し、同年9月に

⁴¹ 阿里山林業鐵路及文化資産管理處「沿線各站周邊旅遊及轉乘資訊」<<https://afrch.forest.gov.tw/0000051>> 2019年5月19日最終確認。

⁴² 記事には「石橋南投庁長」と記載。姓名および職名は以下で確認。王鉄軍「近代日本文官官僚制度の中の台湾総督府官僚」『中京法学』45（2010年）152ページ。

⁴³ 黒田長礼「ミカドキジの新産地」『動物学雑誌』28（1916年）476-477ページ。なお、『鳥』にも内田清之助による報告が寄せられている。内田清之助「みかどきじの新産地」『鳥』1-3（1916年）32ページ。

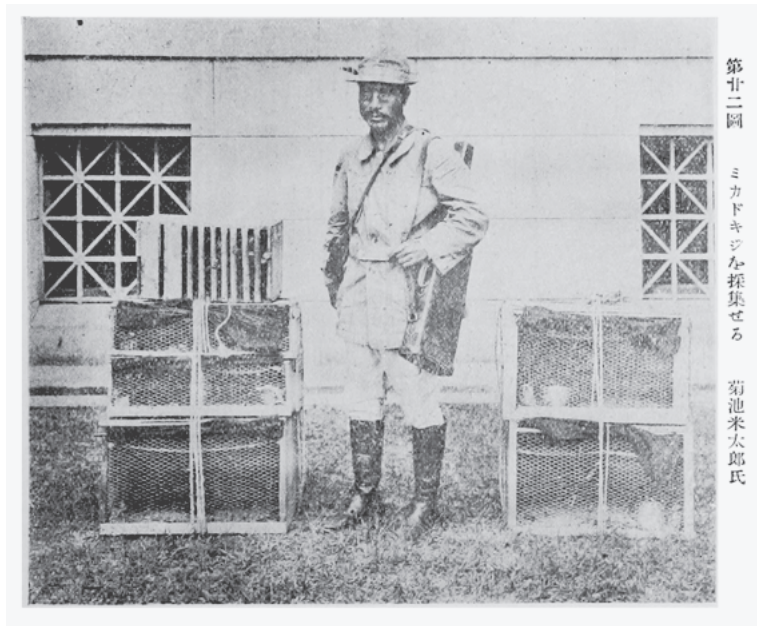


図4 菊池米太郎とミカドキジ

出典：『鳥』2-7（1918年）138ページ。

雄雌一对の生捕に成功した。菊池は捕獲した他の鳥とともに上京した際、ミカドキジの繁殖には十分な可能性があるため、雌の捕獲に努めたいとの抱負を語った⁴⁴。菊池も鳥学会の会員であり、採集後の写真が『鳥』に掲載されている（図4）。『鳥』には撮影地の記載がないが、台湾博物館のカタログ資料によると博物館を背景に撮られた写真である⁴⁵。翌年の春、菊池は再度ミカドキジの採集に赴き、9名の原住民協力者を活用して雄雌二対を生捕し、上京した。その際、5月に開催された鳥学会総会においてミカドキジの幼鳥の標本を披露している⁴⁶。台湾内でも、台北の圓山公園内にある動物園においてミカドキジが展示された。1921年に台湾で蝶の採集を行った昆虫学者の江崎悌三が動物園に立ち寄り、「勿論貧弱なものではあるが、有名なミカドキジ *Calophasis mikado* の生きたものなどは内地では一寸見られない」との感想を残している⁴⁷。

このように数は限られながらも、少しずつ生きたミカドキジが台湾内外に送られたのは、採集人の菊池米太郎によるところが大きい。その菊池が1921年11月に死去すると、『鳥』に寄せられた追悼文では、「氏は天才的な鳥類採集家で特に台湾の鳥類の研究には大部分氏の手

⁴⁴ 『鳥』2-7（1918年）137-138ページ。

⁴⁵ 国立臺灣博物館編『發現臺灣-重訪臺灣博物學與博物學家的年代』24ページ。

⁴⁶ 『鳥』2-8（1919年）224ページ。

⁴⁷ 江崎悌三「台湾採集旅行記」『動物学雑誌』34（1922年）29-30ページ。



内務省出品天然紀念物としての鳥類(第二室の一部)

本標列陳[會覽展の鳥]念記年週十

図5 日本鳥学会10周年記念「鳥の展覧会陳列標本」

出典：『鳥』3-14（1923年）plate VI.

よって採集せられた標本が利用されたとはいえる。特にミカドキジの最初の採集家として有名であった」と、菊池の功績が称えられた⁴⁸。このことは、英語圏の文献に菊池の名前が登場しないことと対照的である。それはまた、罾を張ったり、荷物を運んだり、フィールドでの採集活動を可能にした原住民たちの匿名性についても注意を喚起する。採集活動の現場で採集人と原住民協力者の間でどのようなコミュニケーションが交わされたのか、そこに日本人や漢人の警察官がどのように関与したのかについては、史料上の制約があり断片的なことしかわからないが、そうした空白部分の重要性を認識しておくことは大事だろう。なお、現在（2018年12月時点）の国立台湾博物館では、採集人としての菊池をとりあげた展示コーナーが設置されている。カタログには当時の博物館で展示されていた、菊池が制作したミカドキジ標本の写真も掲載されている⁴⁹。

日本鳥学会は1922年5月の総会において、「鳥の会」との合同により設立10年を記念した「鳥の展覧会」を開催することを決定した⁵⁰。この展示会は、1923年3月3日から3日間、東京赤坂区溜池町の三会堂（現、三会堂ビル）において開催された。『鳥』の「雑報」欄に掲載された報告記事によると、内務省出品による天然記念物に関する展示や、農商務省出品によるキジの発育標本の展示など、合計252点の標本が展示されたという⁵¹。そこにはキジ科の鑑賞用の剥製標本も含まれた（図5の上段。下段は天然記念物の展示）。また、出品者として貢献した者の中に、黒田長礼があげられている。

その黒田は前述のとおり、早くからミカドキジの採集に力を注いできた人物である。黒田のミカドキジに対する思い入れは、同年『鳥』に発表された「ミカドキジに一新属の提唱」にも示されている⁵²。日本鳥学会初代会長（会頭）の飯島魁の死去により、この年に第2代会頭に就任した鷹司信輔が筆頭著者とし、黒田を第二著者とする論説である。「本年は本会創立十周年に相当するを以てその記念としてここに台湾特産ミカドキジ（*Calophasis mikado* Ogilvie-Grant）の属名を左記の如く新設せんとす」と始まり、*Neocalophasis* の属名を掲げたあとに、ミカドキジの特徴が記された。新属名以下は、英語でも記載がある。日本による台湾の植民地化と、その植民地をフィールドとする鳥類学の制度化とが並行するありようが、この新たな属名の提唱にあらわれている。

自然に関する知識の集積と再編にとっての植民地の位置づけは、鳥学会設立10周年事業のひとつとして出版された『日本鳥類目録』初版（1922年）においても、同様である。標題にあ

⁴⁸ 『鳥』3-12/13（1922年）161ページ。

⁴⁹ 国立台湾博物館編『發現臺灣-重訪臺灣博物學與博物學家的年代』24ページ。

⁵⁰ 『鳥』3-12/13（1922年）162ページ。

⁵¹ 『鳥』3-14（1923年）251-253ページ。

⁵² 鷹司信輔、黒田長礼「ミカドキジに一新属の提唱」『鳥』3-12/13（1922年）37ページ。

る「日本」とは地理的空間としての日本列島のことでなく、朝鮮半島や台湾島を含む国土としての日本のことである⁵³。当然、目録には台湾島固有のミカドキジが掲載された。キジ科の執筆担当は黒田である。黒田はキジ科を3つの属に分け、まずキジ属を従来どおり *Phasianus* とし、地理的分布によってコウライキジ、タイワンキジ、キジなどの6亜種をあげている。その半分は黒田が命名者である。

次のヤマドリ属の属名には、オグルヴィ＝グラントが用いた *Calophasis* ではなく *Graphophasianus* を用いた。ここには飯島魁を冠したコシジロヤマドリ *Graphophasianus soemmerringii ijimae* Dresser を含む、本州、四国、九州に生息する5亜種の子種があげられた。地理的分布の異なる亜種間の違いの重要性は、黒田がとくに重視した点だった。このことは『鳥』に掲載されたオグルヴィ＝グラントの訃報にも反映されている。追悼記事は「ミカドキジの命名者」として知られ、「性温厚にして良く後輩を指導し著書も多く」とオグルヴィ＝グラントを称えつつ、「氏は分類学上亜種の学問的価値を認めず分類を粗かにした傾向があったため博物館員としては兎に角の評もあった」と付け加えている⁵⁴。「亜種の学問的価値」というのは、主にキジの分類のことを指していると考えられる。

『日本鳥類目録』に議論を戻そう。『鳥』での提唱を反映して、ミカドキジには3つめの独立した属名 *Neocalophasis* が与えられた。このように『日本鳥類目録』初版は、日本人鳥類学者の視点から帝国日本の鳥類学の知を再編する試みであり、新属名を提唱されたミカドキジはその象徴的な存在になったのである⁵⁵。

この位置づけは、『日本鳥類目録』と同時期に出版された、ビービの『キジ類総説』との比較からも明らかである。『キジ類総説』は、17ヶ月間にわたる調査旅行の成果に基づき、キジ類の地理的分布を包括的に捉え、統一的な分類体系を構築した。キジ属とヤマドリ属の英語表記とラテン語表記は、それぞれ true pheasants / *Phasianus*、および long-tailed pheasants / *Syrmaticus* と表記された。前者については、コウライキジの24の亜種とキジ（ニホンキジ）1種の地理的分布と特徴が示され、後者についてはミカドキジも含め5種があげられた。日本固有種の子種 *Syrmaticus soemmerringii* Temmink, 1830 の亜種には、黒田が1919年に命名したばかりのウスアカヤマドリとシコクヤマドリは反映されていない。ミカドキジの生息地に関しては、阿里山に限定されるとあり、阿里山以外にも生息するという直近の発見も反映されていない⁵⁶。

キジ属とヤマドリ属との関係、およびミカドキジの位置づけについては、その後も学術的な

⁵³ 日本鳥学会編『日本鳥類目録』（日本鳥学会、1922年）。

⁵⁴ 『鳥』4-19（1925年）331-333ページ。

⁵⁵ 日本鳥学会編『日本鳥類目録』（日本鳥学会、1922年）47-49ページ。

⁵⁶ William Beebe, *A Monograph of the Pheasants*, vol. 3 (New York, 1922) pp. 69-204.

議論が続けられたが、鳥類学者たちの間では、分類学上の議論とともに希少種の保全繁殖が喫緊の課題となっていく。フランスの鳥類学者・繁殖家ジャン・デラクールは、そうした変化を象徴する出来事になった。先述のジョンストン夫人とも親交のあったジャン・デラクールは、早くからミカドキジを入手し、1915年にはカラヤマドリとの異種交配にも成功した。そして第一次世界大戦後が終結すると、1920年代から30年代にかけて、フランス領インドシナにおける鳥類の調査を繰り返した。その過程で、日本にも立ち寄ったのである。1926年来日の際には黒田邸に招かれ、剥製標本のほか黒田が飼育した数々の鳥類を披露されたと記録している。鳥舎には雄3羽、雌1羽のミカドキジがおり、デラクールはこれを見て感嘆したようである。ヨーロッパにはミカドキジがいなくなってしまうと書いているので、おそらく戦争の影響もあり、繁殖が継続しなかったのだろう。さらに、政府がミカドキジの捕獲を規制しているため、ヨーロッパに再度ミカドキジが訪れるかは、黒田による繁殖の成果次第だと記している⁵⁷。このとき日本ではすでに天然記念物の保護が法制化され、ミカドキジもその対象として議論されていた。

翌年の来日時には、デラクールは日本鳥学会と鳥の会との合同例会において、「世界のキジ類の話」と題する講演を行った。『鳥』に掲載された報告記事によると、キジ類の分類命名法がテーマのひとつだったようである。「一例を挙げると従来某氏はカウライキジなども、*phasianus colchicus*の亜種として取扱つてあるが之等は少くとも二種に分つべきこと」と述べていたという。また、「日本のキジは確に独立した種である」との考えを披露したと報告されている⁵⁸。デラクールが帰国する際には、300点以上の鳥類と少数の哺乳類が別の船で送られた。天然記念物のルリカケスのほかに、ミカドキジも含まれた。それらは主にデラクールと、その友人でイギリス鳥類飼育学会会長アルフレッド・エズラに寄贈された⁵⁹。このときに寄贈されたミカドキジから始まったのかどうかは不確かだが、その後デラクールのもとでミカドキジの繁殖は順調に進んだようである。1939年には20羽が孵化したと、デラクールは『鳥類飼育繁殖雑誌』に報告している⁶⁰。ただし翌年、ノルマンディー地方にあったデラクールのメナジュリに戦火が及んだため、デラクールは渡米しブロンクス動物園のコンサルタントとして再出発することになった⁶¹。このとき、メナジュリの動物がどの程度レスキューされたのかについては、まだ筆者の調査が及んでいない。

日本に議論を戻そう。1919年に史蹟名勝天然記念物保存法が交付されると、内務省に史跡名

⁵⁷ J. Delacour, 'Japanese Aviculture', *Avicultural Magazine*, 4th ser. vol. 4 (1926) p. 250.

⁵⁸ 『鳥』5-25 (1928年) 500-506 ページ。

⁵⁹ 『鳥』5-25 (1928年) 510 ページ。

⁶⁰ J. Delacour, 'Bird-breeding at Clères', *Avicultural Magazine*, 4th ser. vol. 13 (1935) pp. 24-25.

⁶¹ Ernst Mayr, 'In Memoriam: Jean (Theodore) Delacour', *Auk* 103 (1986) pp. 603-605.

勝天然記念物保存調査会が設置され、項目ごとに保存対象が検討された。動物については、「現時日本に存在する著名の動物にして世界の他の部分に未だ発見せられざるもの（例えば台湾のミカドキジ及ハナドリ、琉球諸島のアカヒゲ、奄美大島のルリカケス同島産黒兔等）」が保存すべき対象であるとまとめられた⁶²。ミカドキジが最初にあげられている点が興味深い。台湾において最初に天然記念物が指定されたのは1933年11月であり、動物ではジュゴンとミカドキジが保存対象となった⁶³。しかし、デラクールが1926年の時点で、政府がミカドキジの捕獲を規制していると記していたことから、すでに何らかの保護政策が先行した可能性もある。

1930年代に入ると『鳥』にミカドキジ関連のニュースが掲載されることは少なくなるが、台湾での天然記念物指定は「雑報」でとりあげられている⁶⁴。繁殖の状況についても、1936年5月の記録として、山階芳麿のもとで22個の産卵があり、第1回分の7個のうち6個が孵化し、そのうち5羽が成長中という内容の掲載がある⁶⁵。こうした日本の鳥類学者・繁殖家の試みが戦中および戦後にかけて、どのように変化したのかについては、また改めて調査する必要があるだろう。

おわりに

本稿はなぜミカドキジはミカドキジと名付けられたのかという問いから出発し、ミカドキジの採集、繁殖、保全の歴史を、その発見時から1930年代まで辿ってきた。最後に予備的な考察を加え、今後の課題と展望を示しておきたい。

ミカドキジという命名の由来は、鳥類標本コレクターのロスチャイルドが入手した、日本の天皇のもとに台湾産の未記載のキジがいるらしいという情報である。それを聞いたオグルヴィー＝グラントは、伝えられたそのキジの特徴から、それがサンケイという既知のキジ種ではないかと推測したものの、この伝聞に因み、今までに見たことのない尾羽をもつキジを、ミカドキジと名付けたのである。

グッドフェローが原住民の帽子の羽根飾りに気がついたことから、新種のキジが発見された。このことは、ミカドキジの関連文献の中で、興味深いエピソードとして今日まで繰り返し紹介されてきた。しかし、ミカドキジの命名の由来を示す部分は、その後文献に登場することはなく、記録として引き継がれていくことはなかった。そのため、ミカドキジという名に新たな意味や価値をあたえる余地が生まれた。

⁶² 『東京朝日新聞』1920年1月22日。

⁶³ 『台湾総督府報』166号（1933年11月26日）。

⁶⁴ 『鳥』8-38（1934年）293ページ。

⁶⁵ 『鳥』9-43（1936年）264ページ。

鳥類学において、鳥種の名は識別のための記号であり、名の由来そのものは鳥類学にとって重要な知識とはならないだろう。あるいは、どのような名がつけられたかによって、その鳥に関する研究の学術的価値が左右されることも、あってはならないことかもしれない。しかし、ミカドキジは、それが台湾固有の希少種であることに加えて、キジ科の分類を刷新する可能性がある点で、日本の鳥類学を立ち上げていこうとする鳥類学者にとって、特別な意味と価値をもつ鳥種だった。ミカドキジの採集、繁殖、保全に費やされた資源と情熱は、ミカドキジの名の象徴性を抜きにして語ることはできないだろう。

ただし、そうした鳥類収集家、採集人、あるいは鳥類学者や飼育繁殖家の感情の次元を考察するためには、学術誌等の刊行物の分析だけでは限界がある。今回の調査の過程で、ミカドキジに関わった人物の書簡史料がロンドン自然史博物館にあることが判明した。その分析からは、ミカドキジという鳥に異なる立場や利害関心から関わった人々の間の、学術的、経済的、感情的関係性が浮かび上がってくると期待される。さらには、刊行史料には未記載のミカドキジの入手経路や繁殖実績がわかるかもしれない。これらの点を明らかにすることで、発見と命名から保全繁殖に至るまでのミカドキジの歴史を構想することが、著者にとっての今後の研究課題である。